
GOD EATER BURST A child of misfortune

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R B U R S T A c h i l d o f m
i s f o r t u n e

【Nコード】

N3380W

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

主人公・河野リヨウは第一部隊リーダーである。ある日討伐対象が切り刻まれ根絶やしにされる怪奇事件が起きる。唯一受注できたミッションに行ったのだがそこには ！？

1 勇者の帰還は悪夢の始まり

『ぶしゅん』と扉が開き茶髪の好青年 第一部隊リーダーの河野コウノ リュウが現れた。

彼は昨日まで休暇だったため家に帰っていたのだ。

「リーダー！」

それに気付いた第一部隊員・・・アリサ・イリーニチナ・アミエーラは彼に駆け寄った。

「ただいま！皆無事で何よりだ」

「いいえ。こっちのセリフです。」

そう言つて微笑むアリサ。

「さーて、鈍った体を解すべくヒバリちゃんに予約してもらつた
プリティヴィ・マータを倒し」

「無理ですよ、リーダー」

「へ？」

その言葉に足を止める。

「・・・あれ？知らないんですか？」

「??？」

「詳しくはオペレーターの方に聞いたほうがいいですよ」
そう言つて階下にいる竹田タケダ ヒバリを指さす。

「あ、リュウさん・・・」

ヒバリはリュウの顔を見ると笑顔を絶やした。

「おいおい、リーダーさん？ヒバリちゃんの笑顔を奪わないでくれ
ねえかあ？」

隣にいた大森オオモリ タツミがケチをつける。

彼をなだめつつ、リュウはヒバリにミッションを頼んだ。

「ああ、休暇前に予約されたプリティヴィ・マータですね。それも
含めてなんですが最近大型アラガミの討伐が激減してるんです。」

ツバキさんによると、なんか切り刻まれたような形で死骸があるんです」

「となると、俺ら以外の何者かによって討伐対象が殺されてるってこと？」

「そうなります……」
「ですから、とヒバリは続けた。」

「発注出来るミッションはこれぐらいですね」
内容は

- ・オウガテイル 一体
- ・コクーンメイデン 一体
- ・ザイゴート 一体

「しょっぱー！」

「仕方ないです」

「平和つてのもいいけど俺ら暇だな……」

「じゃあ一人で行くか、とぼやくリュウの横から聞き覚えのあるがこもった声。」

「このミッションは私も行くよー」

「……この声はミコト ってえええ?!」

隣にいたのは白い耳が折れた可愛い(?)ウサギである。

否。 中身はリュウの親友であり幼馴染の鳥居^{トリイ} ミコト。

「おかえりー。リュウが居ない間暇で暇でミッション行きまくってたらお金と素材いっぱいゲットしてさ」

『がぼっ』と着ぐるみの頭の部分を脱ぐ。 白髪の美少女(?)が現れる。

「ふいっ。あっちい」

「じゃあ着るなよ。……っわけで俺ら二人ね」

「了解しました。発注しておきます」

カタカタとパソコンをいじり始めたヒバリ。

受注し終わると神機やらアイテムやらを取りにリュウは行ってしまった。

「ところでさ、ヒバリちゃん。今度デートとか……」

「タツミさん。しつこいと嫌われちゃうよん？」

「そうですね。私もしつこいのは困りますよ」

「……え」

ミコトもそれを言い終わるとそそくさと逃げていった。

「場所は 贖罪の街か」

「ちやつちやと片付けて帰る」

「おう……それにしても。切り刻まれたような形で……」

・あれだよな。」

「……ハンニバルリントウさん侵食種と同じって言いたいの？」

「ああ。」

「……じゃあ」

「そう」と何かわかったかの様にリュウが言う。

「新しいアラがミ……か」

1 勇者の帰還は悪夢の始まり（後書き）

前回挫折した二次創作です。

続けるぞ！ 今回はきちんとクリアしたからねッ！

あと、キーワード悩むんですけども。

2 謎の人物と

贖罪の街

「おつかしーなー」

戦地に立って15分以上経過している。

「現れねえ……」

そんなとき、ミコトが現れた。神機片手にぶんぶんと手を振っている。

「いちおーこつちも全部探したよ！あとはあの例の場所だけ」

「あ、ああ。忘れてたな」

例の場所、とは教会のような場所。大きく穴が空き、普段は入れない場所だ。

その穴もアラガミによって昔、空けられたのだろう。

簡単に言えば あの日、アリサとリンドウさんに悲劇が起こった場所。

入ると何か音が聞こえる。

「………何かいるぞ」

「うん……」

音が絶える。そして

「行くぞッ」

二人は一気に飛び出す。そこにいたのは

「………人……？」

逆光でよく分からないが、それだけは確実に分かる。

アラガミしか登らないあの高い場所にその人物は居た。

「た、確かに近隣に居住区はあるが 一応ここは立入禁止のはずじゃ？」

「それもそうだ……。おいミコト!!」

リュウが指を指した先には

「あれって……討伐対象の三体!？」

例のごとく、切り刻まれ死んでいた。まだ血が流れているのを見ると新しい。

「……………」

「ん? あ……………」

「居なくなってる……………」

二人が騒いでいる間に、例の人物は去ってしまったのだ。

「……………一体……………」

「ほお、それは興味深い」

帰還し、二人はすぐペイラー・サカキ榊博士に報告をした。

「私が推測するに、シオと同じような感じだと思うんだ」

「シオちゃん?」

「ああ。その件については私が協力しよう。もし、シオと同じようだったら第一部隊に協力を要請するからね」

「博士の場合だと、巻き込むからねつつたほうがいいんじゃないんすか?」

「たしかにそうだね」

そんな他愛ない会話をし、二人はこの部屋を後にした。

「よっ!リーダー」

部屋に戻ろうとしたところで、同期である藤木^{フジキ} コウタにあった。

「コウタ！どーしたの？」

「いやあ、榊のおっさんの研究室に行くのが見えてよ！追うとバシそうだし、待ち伏せってわけ！ で、何かあったの？」

「別に。 なんでもねーよな、ただ素材回収頼まれてただけだ」

「うん、そだよー」

部下に普通に嘘をつく人々。

「そっかあ、じゃあ仕方ねーか」

騙される部下。

「何かあれば言えよな！じゃーな！」

と言ってコウタは自室に帰っていった。

3 お約束

翌日

「あ、リュウさん」

ヒバリが何か言いたげにリュウに声をかけた。

「榊博士からのミッション扱ってますよ。伝言もあるみたいです」
「ん…………。オツケー。見せて見せて」

討伐対象：コンゴウ墮天

君も知つての通り火属性が有効だよ！シオのときと同じように周りに居るアラガミを減らす作戦だ。勿論協力してくれるよね？今のところは君たち以外には伝えてない。二人で行ってきてくれ。

「成程…………。まあコンゴウぐらいなら行けるっしょ。ヒバリちゃん受注頼んだ」

「了解です。」

「……………な」

フィールドは嘆きの平原　　なのだが　　…

「またか……………」

討伐対象、コンゴウ墮天は呆気なく切り刻まれていた。
周りには小型アラガミサイゴートの死骸。

「どうしたらいいんだろーね……………」

「捕喰してアイテム回収して帰ろつぜ」

「いつも通りだなあ……」

と言いつつもミコトの神機は既に捕喰形態だった。

「そうか、今回もか……」

それから何度か繰り返し違つミッションを受注し続け、行き続けていたのだが。

殆ど全てが切られていた。辛うじて生きているものもあれば致命傷。

「困った。私には成す術が思いつかないよ。ここまで首を突っ込んでしまえば後戻りも面倒だ。思いつくまで自分たちの仕事を全うしてていいよ。」

「あいあいさーあー!」

「了解つす」

「って言ってもその仕事は敵によって減らされてるんだけどよ」

「たしかにねー」

「そーだ!とミコト。」

「この前行った嘆きの平原のミッションで大事なものを落としちゃったの。ねえ、探すの手伝ってよ」

「大事なもん?」

「うん。換金アイテム」

「絶対無いから。つーかそれリンドウさんのじゃん」
貰ってこいよ、と呆れ気味に言う。

「あれ?ま、でも!何か落としたの!」

強引にミッションを誘うミコト。 だが、リュウも暇なので断る理由も無いわけである。

「仕方ねえな。 分け前半分な！」

「え”……………」

露骨に嫌な顔をするミコト。 そして目が泳ぎ…………

「……………りょーかいです」

「んだよそれ……………」

嫌々答えたのだ。

4 不幸と

そうして二人は再び嘆きの平原フィールドに訪れた。

「ヒバリちゃんが、言うにはアラガミはいないらしいから安心して探せだ」と

「それは有難いねッ」

かしゃん、と地に下りる。

「まあ落とし物つてのは半分嘘なの」

突然ミコトがそう言った。

「は？」

「知ってる？嘆きの平原が一番目撃情報が多いの」

「……まさか」

「そ」

「新アラガミの……」

そうしているうちに二人はエリアFについた。
ついてすぐ、リュウがこう言った。

「……あれ……って……」

ミコトが目を見張る。そこにいたのは教会にいた例の人物。
逆光も何もなかった。つきりと確認できる。

周りにはアラガミの残骸もなくただただ佇んでいた。

「……」

シオのように青に近い白い肌。腰まであるような長い灰色の髪。

背丈は アリサ……否、サクヤぐらいだろうか。

なんと言っても服。シオの着ていたボロボロの服じゃない。

そこらへんの居住区に住んでそんな人間の服だった。

その人物はやっとこちらに気づいたようで、ゆっくりと首を向ける。

表情は微かに微笑んでいるように伺えた。

二人は歩み寄る人物に武器を向けつつ警戒をしている。

「……お前は……誰だ……ッ」

口を開いたのはリュウ。それに答えるように相手も口を開いた。

「私はエリス」

簡潔にそういった。

「……エリス？」

「確か、ギリシア神話で『不和・争い』を擬人化した神だった
っけ……?」

「貴方達が神を喰らう者たち？」

「……!」

エリスが発した言葉はシオと違いいかにも人間らしい言葉だった。

「……ああ、俺達がゴッドイーターだ」

「そう」

エリスは今度は後退を始める。

「なんだよ、やられるのが怖いのか？」

「そうだね……、ええ、怖い……。それが『かんじょう』
?」

エリスがそういわずとずん、と地が動く。

上から　ヴァジュラが襲ってきた。

一匹だけじゃない。複数だ

「マズイ　!!!」

銃を構えるが周りにはコクーンメイデンなど……。

「……困まれた!!!」

すると、横で白い影が動いた。

エリスだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！」

まさに神速。

エリスが腕を一振りするとアラガミに三、四本ほどの斬撃が襲う。
しかも即死。一瞬で決めたのだ。

「・・・・・・・・ツ す、すげえ・・・・・・・・！」

二人はエリスの攻撃に息をのんだ。

5 起源

支部に連れて帰ってきたエリスは会った時と同じ。表情が全く変わらない。

二人は榊の研究室に居た。

「二人は待っててね。私はちょっと出てくるよ」といって本人は外出した。

「エリス。私はミコト！えっへへ。髪の毛の色似てるじゃん？仲良くしよー」

「……ええ」

「俺はリュウ。こいつの幼馴染だ」

「……よろしく」

二人への応答も表情を変えない。無表情。

「こりゃあシオより手強いな」

「いやあ、お待たせ！」

というところで榊博士が帰ってきた。

第一部隊の全員を連れて。

「成程、な」

一通り説明を聞いて感嘆するソーマ。

「それにしてもシオと全然違うんだな。やっぱり名前はノラミっしょ！？」

と、コウタ。まだ心残りだったらしい。

「エリスだよ！自分で言ってたよ」

「……くそ……」

「聞くのもなんだけど、君はどうやってできたのかな？」
唐突に榊がそう言う。

「……私の起源は人間」

「……人……だったの？」

「いいえ。正しく言えば私はハーフ。アラガミと、人の。」

「……どう……いう……？」

ハーフというより正しく言えばアラガミと人を足して二で割った存在。

半アラガミっていうのかしら。

記憶が荒々しくてよくわからないけど、どちらかがどちらかを喰らったの。

どっちにしろ瀕死だったみたいね。餓死状態だったの。

そしてそのアラガミはあなたたちの知らないアラガミよ。

未だに確認されていないの。

奇跡的にどちらも生きることが可能だった。

この、代償を背負って。

「……代償？」

「ええ」

俯いて彼女は応えた。

そんなとき

『緊急事態！！緊急事態！！支部内にアラガミ反応を確認！！』

と。

警報と共にアナウンスが流れる。

「な、何!? 何で・・・!?」

「君たちは守備に向いなさい。さ、早く」

と、榊が言う。

「・・・分かりました! ほら、行くわよみんな!」
とサクヤが皆を連れていった。

6 受け入れ

「相手が雑魚ばかりでよかったですね」

と、アリサ。一通りカタはついたようだ。

「そうだねー。それにしても突然なんだったんだろうな」

「……さあな。それにしても奴の言葉の続きが気になる」

「あら？ソーマが意思を示すなんて面白いじゃない。早く戻りましょ」

「やあ皆おかえり」

と神が出迎えた。エリスは変わらずソファに座りきりだった。

変わったと言えば……。

「……あれ？そのネックレス……」

ミコトがエリスの首にかかっていた見覚えのないネックレスのことを言う。

「ああ、これかい？彼女の力を封じるための一種さ」

「……力？」

エリスの力はとてつもなく強いものだった。

彼女は無意識にアラガミを呼んでしまう。そう、だから彼女はアラガミを倒し続けた。

「で、でも、そんな力自体を収めたら戦えないんじゃないか？」
とリュウが聞いた。

「大丈夫！安心して。“アラガミと戦闘時のみ”戦闘力だけ戻るよ。

アラガミを引き寄せる力は戻らないからさらに安心！」

「これなら有難いしもつとここにいれるわ」

第一部隊は再び櫛を天才だと確信した。

「あ、そうだ。男性陣はもう帰っていいよ。ちょっと女性陣には残ってもらおう。」

「服、ですか？」

シオと同じ相談だった。

「ああ、そこらへんで拾ったような古服じゃあ可哀想だからね。まあ、シオみたいにボロボロじゃないけど……」

「ちなみに聞くけど、エリスのこの服って人のもの？」

拾ったの、とエリス。

「じゃあアラガミ素材じゃなくてもだいじょーぶだねっ」

「じゃあ、デザインは任せるよ」

シオの一件とは別にとても簡単に終わったのだった。

「服ねえ。何が似合うかしら」

「デザインは本とかから選ぶとして出来上がるまでミコトの服を借りるのはどうでしょう？」

アリサがそう提案した。皆もそれでいいということだった。

「じゃあ、エリス。私の部屋行こう」

「ええ」

「ミコト」

「うん？なに？」

「半アラガミの私が、こんな待遇でいいの？」

「それをいうなら、ソーマだって半アラガミだよ。だけど、人と変わらない生活をしている。」

誰もが思っているわけじゃないけど、アラガミと人。私は その二種の共存を願ってる」

「……ミコト」

彼女がこの支部に来てやっと口を緩めた。感情を表したのだ。

「ささ！ 気に入ったの選んでよ！ 有り余った素材とお金に任せて作ったのがいっぱいあるから！」

数分後 二人が部屋から出てきた。

「あ、コウタ。なんでいんの？」

「失礼だな！ 見たかったんだよ、悪い？」

「……気持ち悪い……」

「……」

「嘘だよ、嘘だから、ごめんね」

そんな茶番みたいな会話途中、誰かのお腹が鳴った。

「……え？」

コウタもミコトも違う となると……。

「……すいません」

とエリスが言う。

「じゃ、次は腹ごしらえ！」

7 お食事

エリスの腹ごしらえ とやはりシオと同じで
アラガミ。

無論他の食べ物も食べることができるがこれは習慣。
何故かアラガミしか好まぬ体質だった。

「今回の討伐対象はー！」

と元気のいい明るい声が熱い熱い煉獄の地下街に響き渡る。

「シユウ、シユウ墮天、セクメトでーっす！いえい！いえーい！！」

「何でミコト無駄に元気なんですか・・・」

「だあってえー！シユウ類のアラガミバレット好きなんだもんッ」

「んなことどーだっついていーだろ！ほれ！索敵めいれーい」

リーダーであるリュウが腕輪をかざす。

索敵命令が出された。

「あいあーい」

「万が一に備え二人ひと組みで頼む」

俺はアリサとな、とリュウ。

そうしてまず一体目の討伐対象シユウの索敵が開始された。

「いませんね」

「ああ。案の定どっかで飯でも喰く・・・」

「？　どうかしまし・・・」

彼らの目線の先にいたのは スサノオ。

「・・・待てよ待てよ・・・流石にきついで・・・」

ゆっくりと気付かれぬよう後退する。

「倒せてもあと三体シユウ種が残ってますもんね・・・」
アリサもゆっくりと後退する。

・・・その時　　！！

「二人ともおっく！そっちはどうだったあっく！？」

「　　ッ！！！！！！」

この大声。　恐る恐る彼ら二人はスサノオの方へ向いた。

こちらに向かってきた。

「ミコトのバカ！　あのスサノオが見えませ　　」

「アリサ！！！！上！！！！」

「・・・ッ！！」

即効でバックアップをしたが距離が足りない　　！
誰もがもうだめだと思った時。　その白い影は動いた

8 お食事？

「アリサ！！！危な」

「ミコト どいて！」

どん、とミコトを突き飛ばし、エリスはアリサの真上へと出た。

そして、彼女お得意の瞬殺の人薙ぎ　！！

……が、大いに外れる。天井にぶち当たった。

「……あ」

「バカー！！！！！」

そう言いつつもミコトは剣形態を銃形態へと変え、数発バレットをぶち込んだ。

「アリサ！ぼーっとしなさい！討伐対象たんぱたいしょうに気付かれる前に叩くよ！」

「……　！は、はい！」

「ったく、リーダーは俺だつてのに……、んま、気を取り直して……。」

「いただきますあーす！」

「……ふう、大分時間使ったね」

「だな……。」

スサノオの討伐が完了したのか、四人は非討伐対象であるスサノオの捕喰を行っていた。

「元気ないなあ、もう！ほらさっさと行こー！ミッションもあるんだし」

「……そう、ですね」

アリサが嘆息のような返事をする。

「ヒバリちゃんには、遅れるっていつてあるし、本部になにかあってもほかの隊員がいるし、ね？」

くよくよすなって！とリーダーの背中を思い切りぶち叩く。

「つてえ！？」などと本当に痛そうにする彼だった。

「やあや、おかえりい〜〜」

帰ってすぐ二人は榊に報告をした。

「腹ごしらえは万全だね？ふむふむ」

「それとなんですが……博士」

「何かい？」

「彼女は保護しましたがどうするんですか？」

あてはないよ、と榊。

研究室に沈黙が訪れる。

「……ま、アラガミの出現を減らすためにも彼女の保護は要るだろう」

「そうですね」

「そうだ、と榊。」

「君たちのいない間に支部内には伝えたけど、もう少し先 一週間後ぐらいかな……」

「それぐらいに新しい支部長がくるんだ」

「へえ……」

「不安かい？」

「いや……別に」

「口ごもるリュウ。」

今度はミコトが会話を遮るように口を開けた。

「報告は済ましました。私たちは引かせていただきますが、よろしいですね?」

「ん。ご苦労さま」

研究室を出て、二人は口を開く。

「らしくないな。疑ってるの?」

榊と同じような質問をミコトは彼にした。

「……まあな」

「また何かあれば私たちがなんとかすればいい。でしょ?」

そういつてはにかむ彼女。それを見て、彼の口は自然に微笑んでいた。

「……確かに。……あー腹減った! 飯食いにいこうぜ」

「今日はジャイアントとうもろこしだよ」

「昨日と変わりねー」

普段と変わらぬ足取りで彼らは仲間のもとへ向かった。

9 新型と

外は真つ暗だった。

神は一人研究室にこもり、モニターを凝視していた。

数秒立つと、こりたのか、彼はモニターから目を離し短く嘆息する。しばらく考え、彼は電源を落とす。

彼の見つめていたモニターに映っていたものは

その頃、エリスは一人外に居た。

丸い、地球と変わらぬ外見の月を見上げていたのだ。青々と緑が生える月を。

「・・・・・・・・・・」

彼女が何を想ったのか。何かを感じていたのか。

不意に彼女は瞳を閉じ、考え事を始める。

「・・・・・・・・・・くだらないわ」

そう嘆き、ミコトの待つ、部屋へと戻っていった。

それからというもの、極東は何の変哲もなく普通に日常が過ぎていた。

「お、今日は新型のお二人さんとミッションね！」

「よろしく願います！」

「願います！」

アネット、フェデリコの二人だ。

実際、指導にあたっていたのは第一部隊のリーダーリュウなのでミコトがこの二人と直接同じミッションなのは、実質初めてである。

「宜しくね。足を引つ張らないよう私も頑張るしさ」
「そ、そんなこと!」
「そうですよ!」
そんなことよりミッション内容は?とアネット。
「今日はね、クアドリガ墮天とヴァジユラだ」
「に、二体ですね」
「大丈夫大丈夫。火属性のバレット、忘れないでね」
「わかりました!!」
「それじゃ、点検後に出勤ゲート前集合で!」

「お、来たね」

ゲート前に二人は現れた。

緊張でもしているのか、無駄に背筋が伸びている。

「あはは、緊張しないでいいよ。リュウ見たく怖くないからさ」とはにかんで緊張を和らげるミコト。

「それじゃ、最終確認ね」

「あ、はい!」

「戦地は『鎮魂の廃寺』。討伐対象は言ったとおり『ヴァジユラ』
『クアドリガ墮天』ね。

小型は居ないらしいけど、注意は必要かな。質問はない?」

「も、問題ないです!」「俺もです!」

「オーケー。じゃ、行こうか」

前話でミコトが言ったようにフィールドは『鎮魂の廃寺』だった。雪の降り積もる廃寺の密集地に三人はいた。

敵は中々な相手だ。だが単体ずつで襲ってくるらしいのでミコトも新人二人も安心して見回っていた。

待機場所から降り、坂を上った所で早速一体目、ヴァジュラを発見した。

相手側はまだ気づいてないらしく、アイテムポイントにゆっくり足を進めていた。

「・・・ミコトさん、倒さないんですか？」

「まあ、まあ、後ろからゆっくり近付いて喰うのさ」

ミコトはリュウと違い、比較的よく食べる奴だった。

食べるだけで撃ちはせず、大抵渡すだけだった。

「・・・ふ、二人とも・・・ま、待つてください」

一方、鈍足のアネットは二人に置いていかれゆっくりながらも頑張っつてついで行った。

ヴァジュラがアイテムポイントで食事を始めた。

「うっしやー！」

ミコトは剣を構え捕喰形態へと変える。

そして

「いただっきまーっすっ」

がぶり、と盛大に噛み付く。

無論、ヴァジュラに気づかれる。

「アネットー！おねがい！」

ここでも新人にバレットを渡すミコト。

そして銃形態のまま、更にバレットを撃ち込む。

「発射あ！」

横腹部に数発当たり、ヴァジュラがこころなしかよるめく。

「こら！ぼーっとしてないで続ける！」

「あ、はい！」

口を開けてぼかんとしている二人に注意するミコト。

アネットは剣形態から銃形態に変え、アラガミバレットを撃ち込んだ。

「倒れて！」

よるめきかけていたヴァジュラにヒットし、ヴァジュラはそのまま横に倒れた。

「一気に叩くよ！」

「はい！」

「お疲れ！次はクアドリガ墮天だよ」

につこりと微笑んでヴァジュラを捕食するミコト。

例の新人二人は……。

「……俺……戦えるかな……アネット……」

「私も無理よ……」

腰を下ろし、嘆息していた。

「何でミコトさんあんなに元気なの？幾らショットだからって違うわよね」

「だよなあ……」

「……二人が聞いたところ

「慣れだよーん？ありゃ？じゃありユウは本気出してなかったわけねー」

だそうだった。

「じゃありユウさんの本気って……」

「考えたくないよ、俺……」

ずずうん、と地鳴り。

「降りてきたな！クアドリガ墮天ちゃあーん」

捕喰し、元気になったミコトがうずうずと楽しそうにつぶやく。

「さ、最後の一匹いこーかね」

10 新型と？（後書き）

ミコトちゃんのコVはうちのVです。
リュウもまた然り。

前話で話したとおり、ミコトはよく食べる方だ。

捕喰はコンボ捕喰でなく、（めんどくさいと言われようが）チャージ捕喰。

相手がひるんでる時でない時も無理して捕喰をするのでよく死ぬことも。

……例えば今とか。

「ミ、ミコトさぁーん！！」

「鎮魂レムリアの廃寺で死んだら凍死しますよ！！」

「……ふ…新人、あとは…まか…せた」

「なんて言わないでくださいよ！大丈夫ですか？」

「リンクエイドされちゃったよ〜」

「よっこいしょ、と立ち上がるミコト。

「よくもやってくれたな」

「もう無茶して食べないでくださいね」

渋々と頷くミコトだった。

「はい！ミッション完了です」

クアドリガ墮天、討伐完了。

「あとはかえるだけですな」

「ノンノン。家に着くまで警戒だよ」

「はい！」

「おう、おかえり、ミコト」
「ただいまー 新人いい仕事するね うんうん」
「お前がよく死ぬだけじゃねーの」
「う、うるっさいなー!!」
会話をしている二人に割り込むようにコウタがやってきた。
「よ、二人。“新支部長”が呼んでたぜ」
「「新支部長？」」

11 新型と？（後書き）

「<http://www16.atwiki.jp/goodeat-erburst-wiki/>」

こちらのサイトには勝手ながらお世話になってます。

ゲームしてもわからないことあるもんね！ね！！

まあ基本はわかるけどね マジだから

悪巧みと挨拶

支部長室に行くまでの間、ミコトはぶつぶつぶつぶつ、と愚痴を言っていた。

「なんで私まで？第一部隊リーダーのリユウだけで十分じゃん！！」
「おい」

「めんどつくさー！任務帰りで疲れてるのにさあ」

「あ、あの」

「お腹すいたよお！早く終わらせて帰る。またコウタに取られたら今度は殺す！！」

「あの、ミコトさん？」

「やっと声を掛けられたリユウ。」

「あ”あ?！」

「すみません」

無理でした。

「やあ、よく来たね」

新支部長、ロイル・レグルスを眼前にして、リユウ、ミコトは

「帰っていいですかあ」

「何故俺たちを呼んだのでしょうか」

単刀直入に聞いた。

そう、挨拶・自己称だけであれば、リーダーだけじゃなく第一部隊

全員呼べばいいこと。

ましてや、ミコトだなんていらぬ存在。

「君達には優秀な成績がある。私もこの仕事は初めてだ。いろいろ教えてもらおうと」

「だったら、榊さんとか、ツバキさんとかいるじゃないですかあ？それに私は優秀な成績とか出してませんし。つーわけで帰りますけどお？」

自分だけ逃げようとしている人一人。

「どの成績も、ミコトと第一部隊の仲間があつてこそです」

と、リユウも付け加える。

「俺たちはあなたがどんなことをしようと、手伝いません。いくら命令でもね」

「……ほう」

「失礼します。」

「なんつつつつつでお前あんな言い方するんだよ?!」

「印象悪くしよっかなって」

「俺のことも考える!!!」

支部長室を出て、次は榊博士のラボに向かっていた。

何分、だいぶ長い間エリスを放置していた訳だ。どうなっているかわからない。

「失礼しまーす」

コンコン、とノック。返事はない。

「……………」

開いたドアの向こうには

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380w/>

GOD EATER BURST A child of misfortune

2011年12月11日14時52分発行